

大阪府公文書館明治150年企画

# 明治の大阪

「天下の台所」から「東洋のマンチェスター」へ

## **<目次>**

**一、「天下の台所」の崩壊**

**二、大阪の再生**

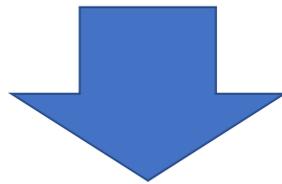
**三、「東洋のマンチェスター」へ**

**四、公害問題**

# 明治日本の近代化をめぐる評価

■東洋の弱小国・日本が世界列強に比肩する大国にのし上がった過程

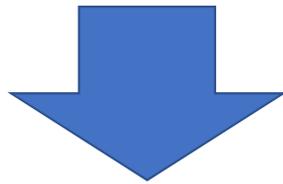
■東アジア諸国にとっては、日本が帝国主義侵略に加担していく過程



現在、日本とアジア諸国・地域との間に横たわる  
「歴史認識」の相違

# 「思想連鎖」という立場（山室信一）

たとえば、明治日本における法の近代化。  
西洋から受け継いだ近代法の原則（「法の継受」）が、植  
民地支配などの形を通じて、東アジアの国・地域に広がっ  
ていった（「法の越境」）



このような立場から、明治維新後、一時傾いた大阪の経済  
が蘇った過程を概観するとともに、お雇い外国人の力を借  
りて成功した事業が海外諸国の模範となったいくつかの事  
例を大阪府の歴史的公文書で紹介する。

# 「天下の台所」の崩壊 ～商業都市の崩壊～

# かつての大坂は「天下の台所」…

幕末の漢学者廣瀬旭莊

「天下の貨七分は浪華にあり、浪華の貨は舟中にあり」

水運の便→諸地方からの物産が集散→問屋業→  
おびただしい口銭・倉敷料

## ※大名貸し

かつて中之島には**蔵屋敷**があった。米の取り扱いは、のちに大名貸に繋がった。

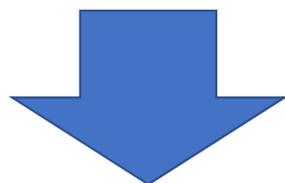
大名の販売代金を扱ったのは、掛屋であるが、国内の多くの地域で米は当時毎年秋ないし冬に1回限りしか入荷できず、しかも販売には時間がかかった。他方、大名は米の売買を大坂商人に委託する際、販売代金を即金で求めた。そこから、掛屋が大名に対して一時貸しを行うようになった。

このようにして始まった大名貸には利子がつけられる→江戸中期までは収益の多いビジネスであった。

# 大阪商業の特質は

卸売業（モノ）

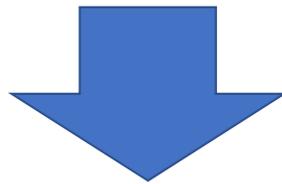
大名相手の金融業（カネ）



近世から江戸中期までの大坂は、日本の金融センターであった。

# 「天下の台所」の経済を襲った五つの嵐

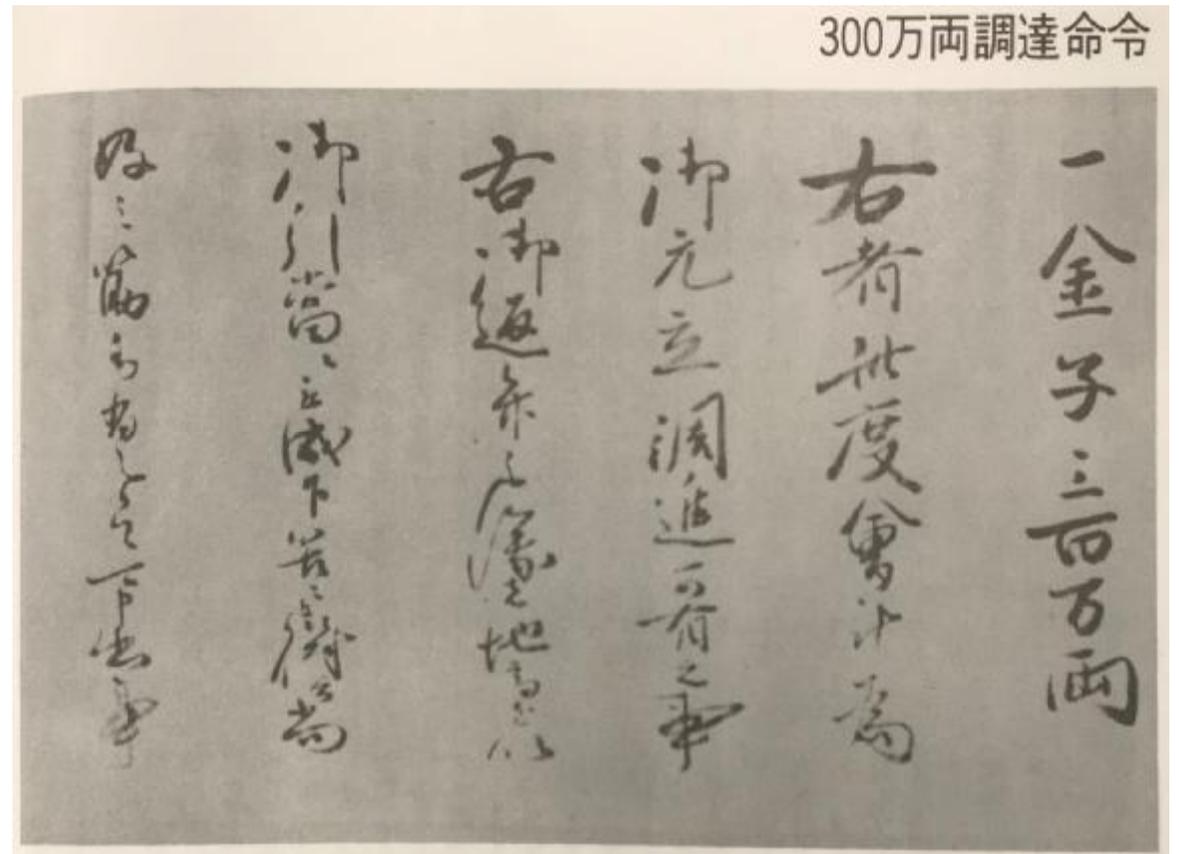
- ① 御用金
- ② 慶応4年5月の銀目廃止
- ③ 明治4年の廃藩置県による諸藩蔵屋敷の廃止
- ④ 5年4月の株仲間解散、
- ⑤ 6年3月の藩債処分



多くの豪商が倒産、大阪商人は大打撃を受けた。

## ①御用金の調達

幕末の二度の征長の役で幕府の軍費負担に苦しんだ大阪の商人は、さらに明治新政府から莫大な御用金を課せられた。



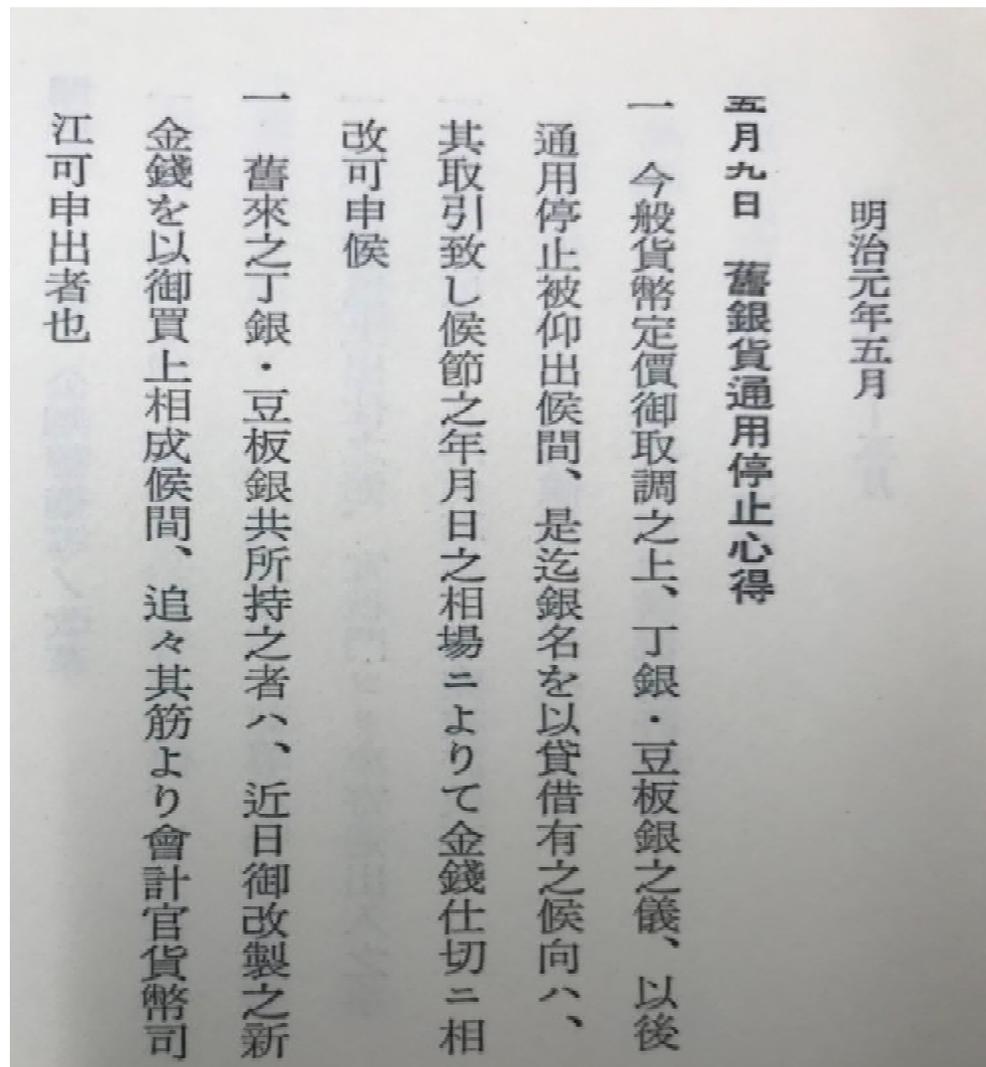
130人の大阪の豪商を驚かせた300万両（昭和41年の貨幣価値では約五百十億円）の調達命令（『実記・百年の大阪』66頁）。

## ②銀目廃止

明治元年5月9日、銀目停止の布告が出された。

大阪の両替商がたちまち約40軒が倒産。

さらに、「蔵屋敷廃止」（4年）。「株仲間解散」（5年）。



「舊銀貨通用停止心得」（『大阪府令集 1』56頁）

### ③「蔵屋敷廃止」(4年) ④「株仲間解散」(5年)

明治4年7月の廃藩置県による**諸藩蔵屋敷の廃止**、5年4月の**株仲間解散**が実行した→貨物の大坂に入ってくる量が激減、大阪の商況がどん底に突き落とされた。

### ⑤藩債処分(6年)

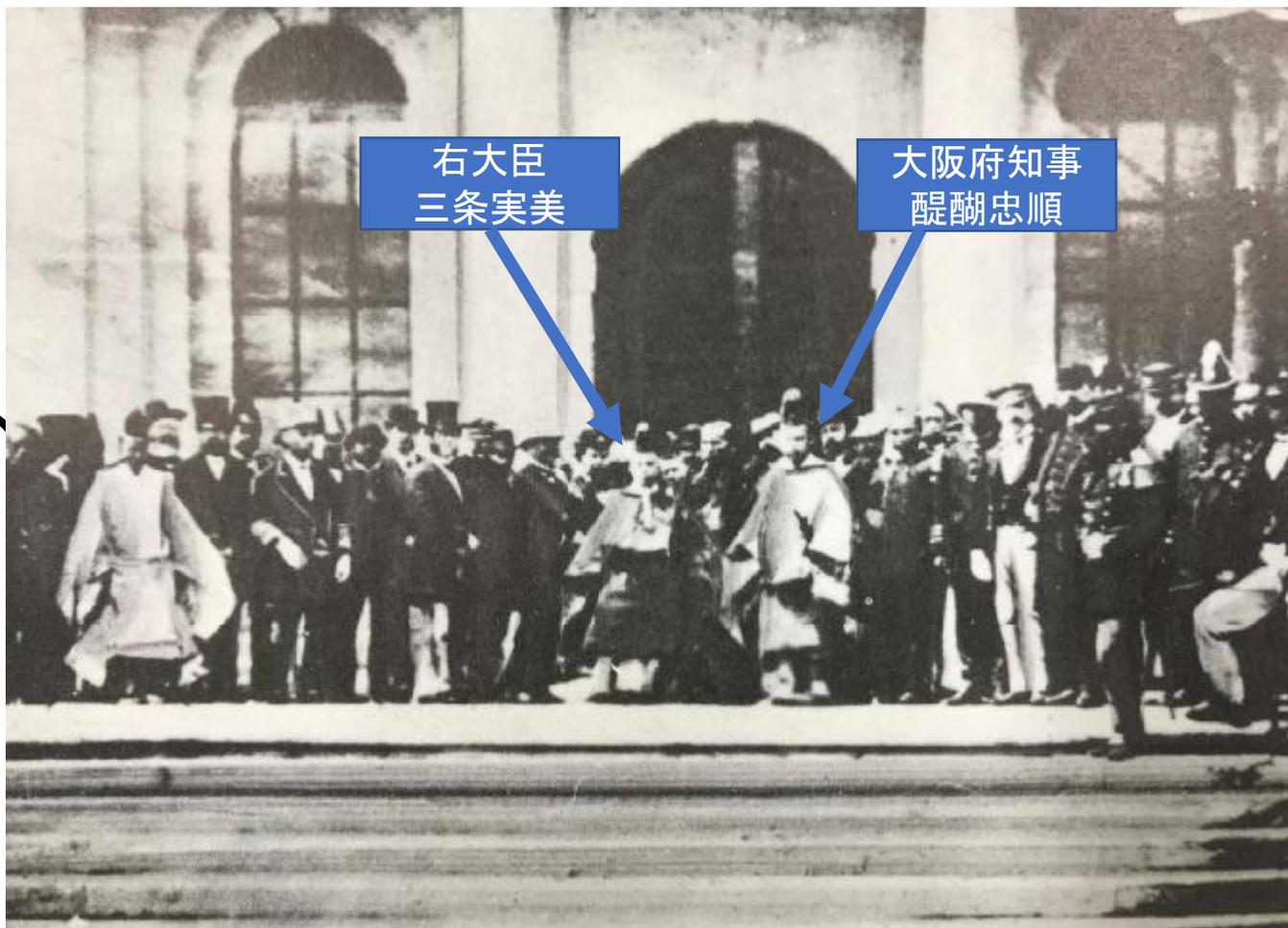
決定的な打撃を与えたのは、6年3月の**藩債処分**である。大阪町人は長いあいだ、この藩債が生む利息により、富を蓄積してきた。廃藩置県にともない、明治政府が、古いものを帳消しにし、そうでないものでも、無利息あるいは低利息の長年賦払いとなった。

# 大阪の再生

## 一、造幣局

造幣局は、大川（旧淀川）に面した天満川崎（現、北区天満）の地で、明治4年2月に創業式を行った。

当初は、造幣寮と称していたが、同10年1月に造幣局となり、今日に至っている。

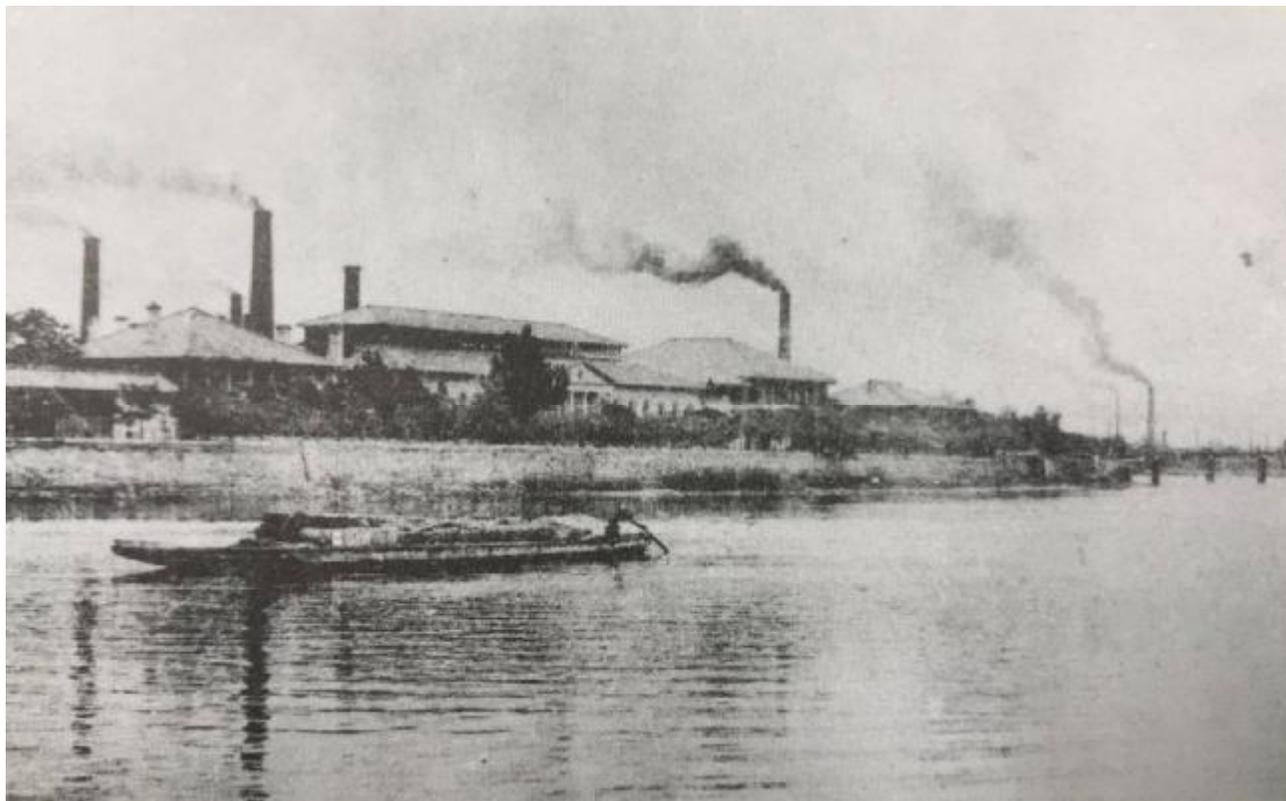


創業式では祝砲21発を撃ち、右大臣三条実美が烏帽子姿で創業宣言を行った。『写真集 おおさか100年』57頁。

## 一、造幣局

造幣局は貨幣をつくるのだが、それに関連して、硫酸・ソーダ・石炭ガス・コークス・銅などの製造工場を必要とした。

このことは大阪の化学工業の発展に貢献した。



明治4年の造幣寮  
『写真集 おおさか100年』57頁。

※清国かの視察

十月廿二日来廳

日本紡績

天満織物

造幣中局

石三ヶ所へ紹介

状交付ス

七十八

敬啟者茲有福建游歴官陳通判常賢素仰  
 貴國工商之進步大阪又實業之中心欲往參  
 觀織布紡紗各廠用廣見聞求為紹介務祈  
 推愛關垂轉達各該工廠以禮接待俾遂觀先  
 之願則感荷

隆情無極矣專此奉懇順頌

日祉

大阪府知事高崎親章閣下

駐劄神戸兼管大阪領事官宗室長福

先緒三十二年九月初五日

神戸清領事府

陳 常 賢

福建福州府

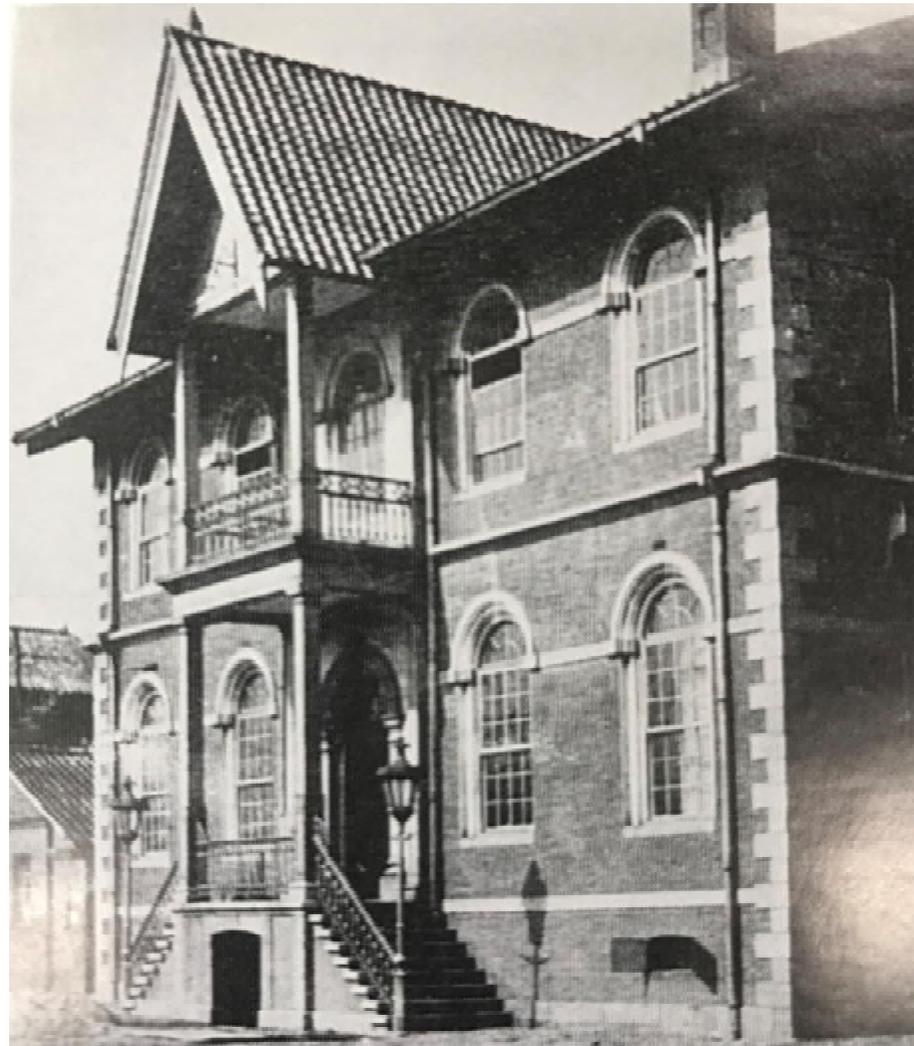
林 同 瀨

漢口福州府

## 二、砲兵工廠

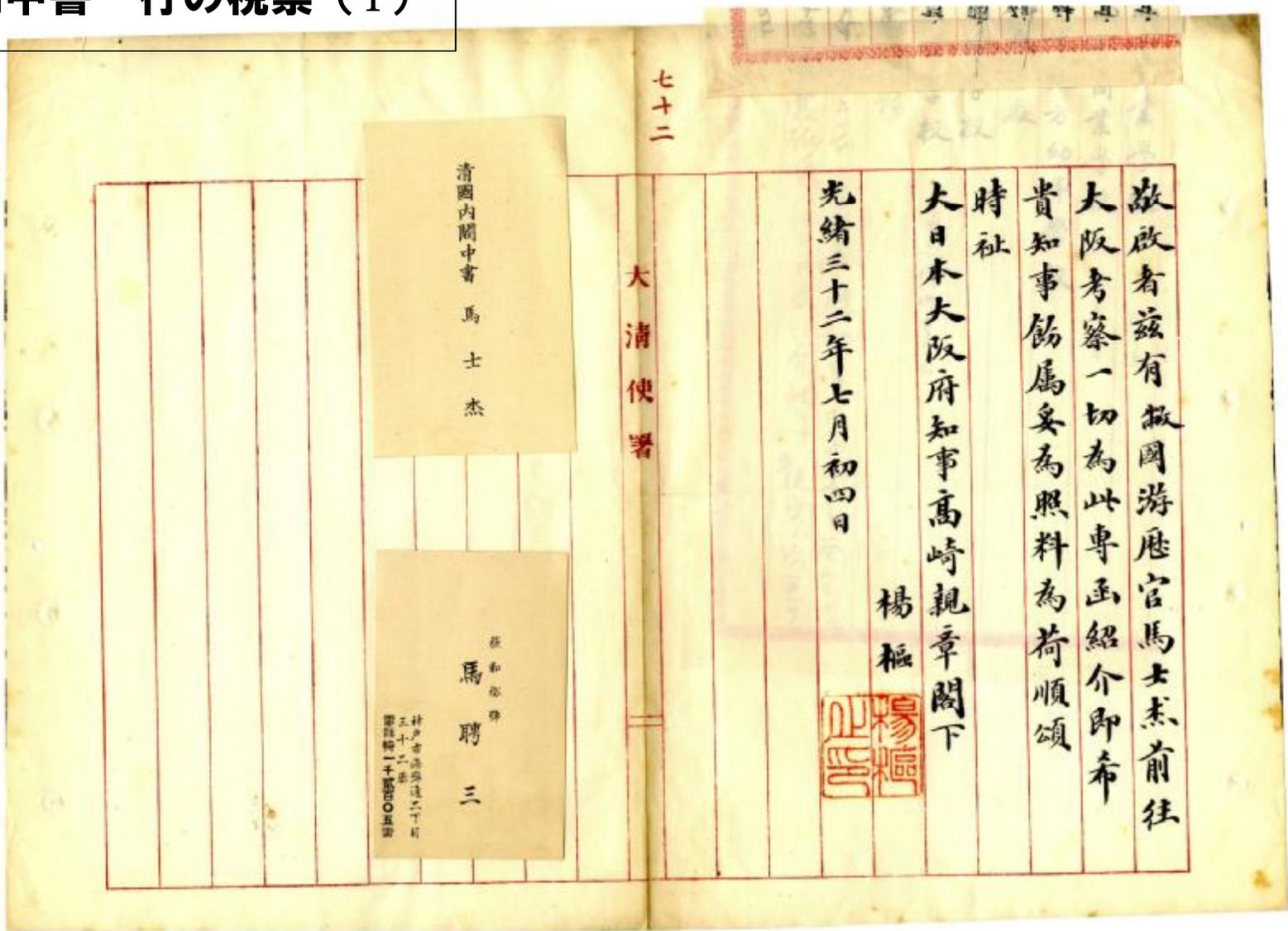
大阪砲兵工廠は、明治3年4月、大阪城三の丸青屋口に設置された造兵司に起源する。

その後、大阪砲兵工廠（明治12年10月）、陸軍造兵廠大阪工廠（大正12年）、大阪陸軍造兵廠（昭和15年）と改称されたが、一般的には砲兵工廠の名で呼び慣らされた。

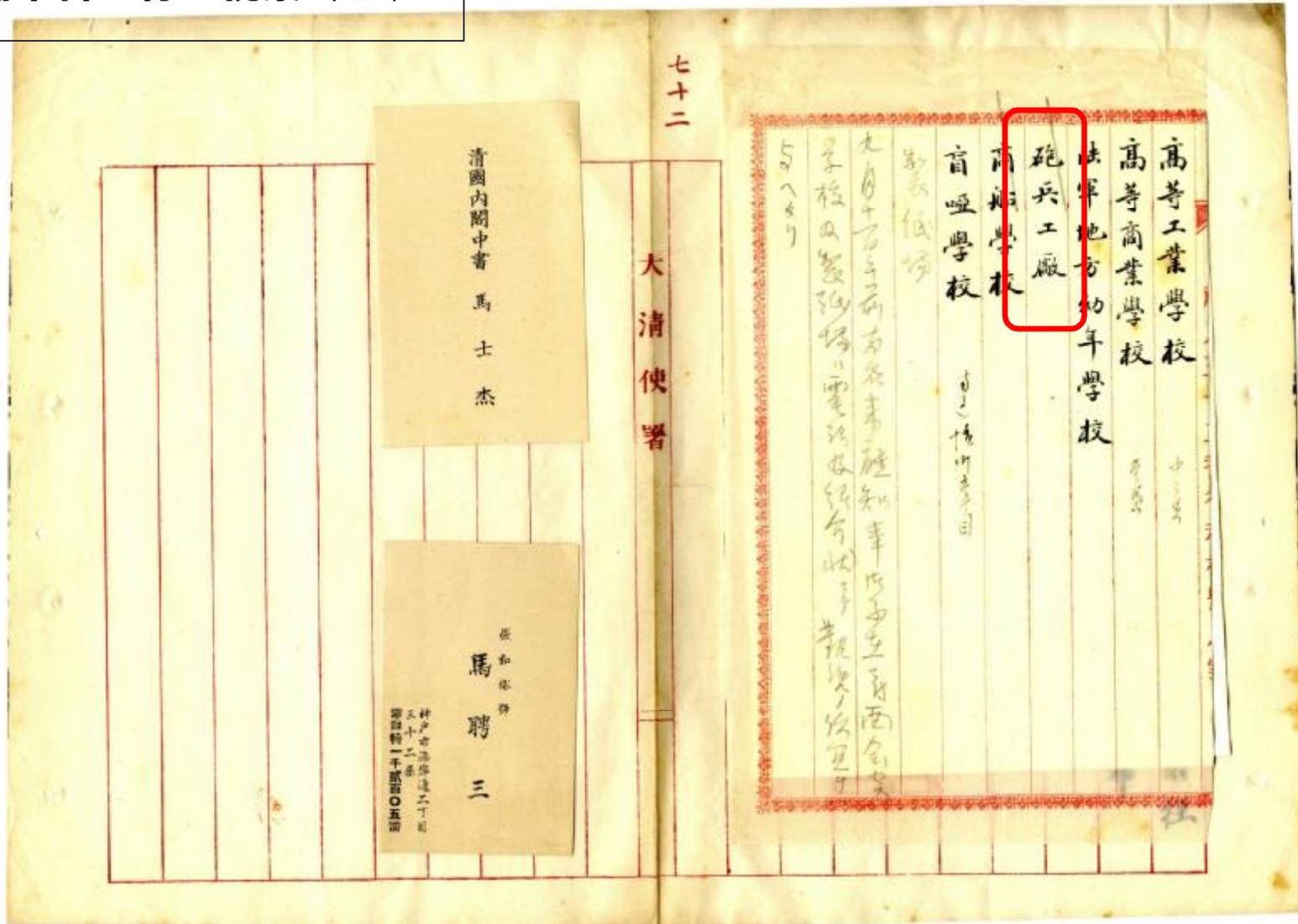


大阪砲兵工廠本部建物  
（『大阪砲兵工廠の研究』口絵1）

※清国内閣中書一行の視察（1）



※清国内閣中書一行の視察（2）



### 三、医学校と舎密(せいみ)局

明治2年4月、大福寺寺で「大阪仮病院」と院」として発足し、付付属医学校も併設していた。

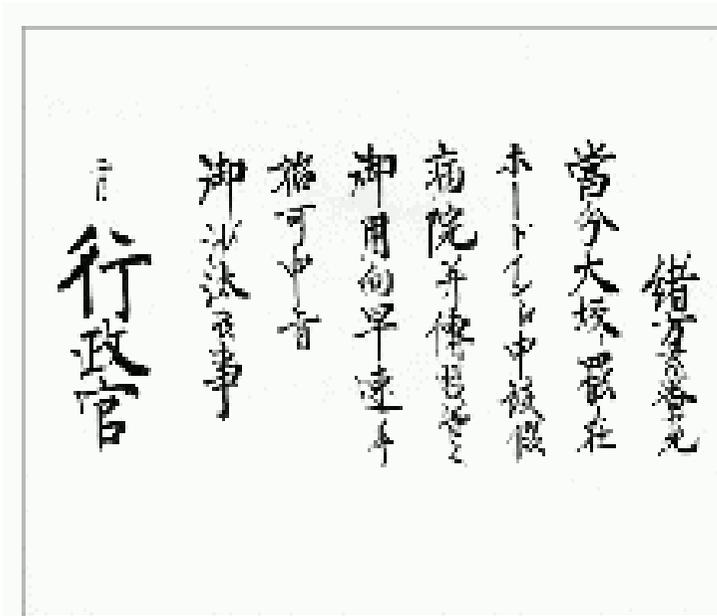
主席教授のボートウィン、病院と医学学伝習の責任者・緒緒方惟準(おがたこれよし)らが写っている。



明治2年6月 大福寺時代の大阪仮病院教師・生徒集合写真  
(『大阪春秋』129巻)

医師スタッフのうち、内外科を担当した仮病院伝習御用掛**緒方維準**が居た。

緒方維準は、洪庵の次男で、前年オランダ留学から帰国したばかり、26才の新進医者であった。そのほか、かつての緒方洪庵の門弟が多く、適塾の伝統が強く反映していた。



緒方 惟準  
1843-1909

緒方惟準の行政官辞令 明治2年2月  
(大阪大学総合学術博物館 第2回企画展より)

# 府立大阪病院

仮病院が次第に充実し、明治12(1879)年、北区の中之島常安町に移設。

明治13年に「府立大阪病院」と改称した。

のちに阪大病院につながっていく。



『写真集 おおさかの100年』62頁。

# 舎密局

明治2年5月1日、大阪城の外濠のそばの舎密局では、真っ新しい校舎で晴れの開学式が挙行された。

大阪府知事の西四辻公業、西本清介府弁事、田中芳男御用掛をはじめ新政府の諸官、オランダ・アメリカはじめの大阪駐在領事らが参列し、教頭のオランダ人ハラタマが開学の辞を述べた。



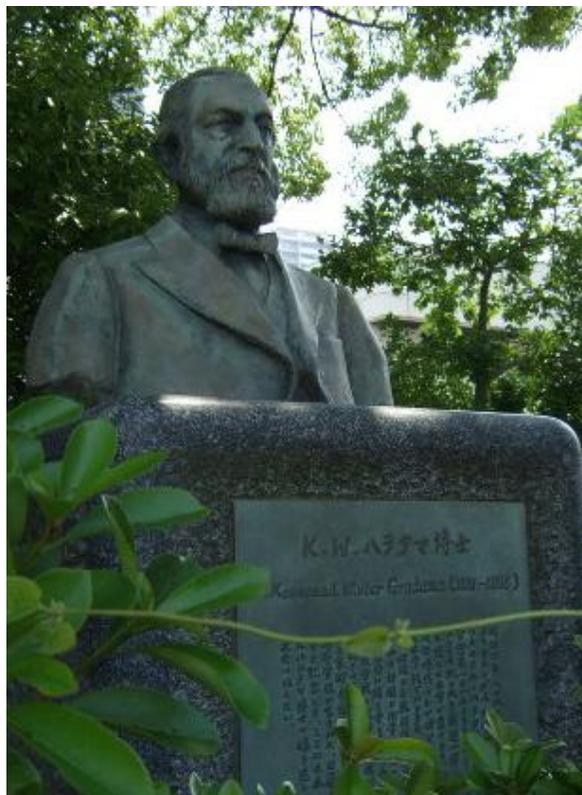
舎密局本館 ハラタマが明治4年の帰国時にオランダに持ち帰り長くハラタマ家に保存されていた写真。

『大阪春秋』 129号、25頁

## クーンラート・ウォルテル・ハラタマ (1831-1888)

1831年にオランダに生まれ。ユトレヒトの国立陸軍医学校を卒業して、母校の理化学教師になった。ユトレヒト大学でも学び、自然科学博士と医学博士の学位を持っていた。来日した時は35歳。

ハラタマの提唱で、明治2年開校以来、毎週日曜日の休日制を採用し、八月に2週間、夏季休暇を実施するなど、西欧の習慣を日本に導入した。



# 舎密局開講式記念撮影 明治2年



『大阪春秋』 129号、26頁

## その後…

■舎密局は、京都へ移り旧制第三高等学校の設立につながり、現在の**京都大学**となった。

■医学校は、その後日本初の公立医科大学になり、**大阪大学医学部**へと発展した。



大阪にまいた近代科学の二つの種がやがて芽を吹いて華々しい開花をとげるに至った。

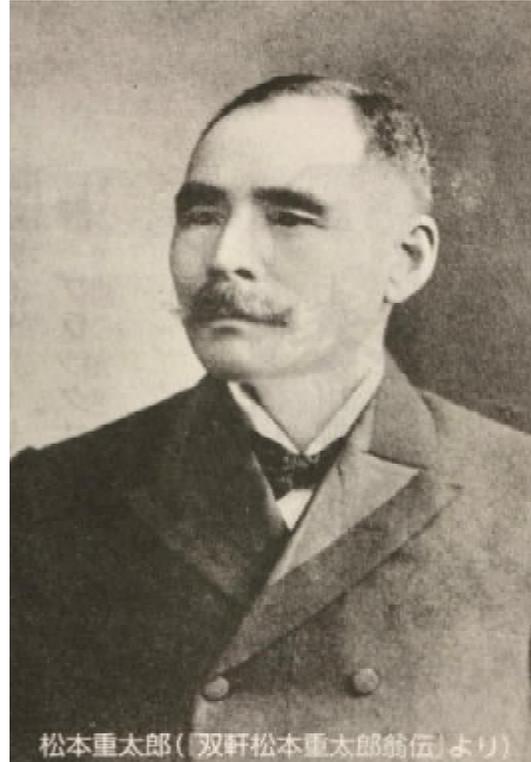
「東洋のマンチェスター」へ  
～工業都市へと成長～

# 一、実業家の登場

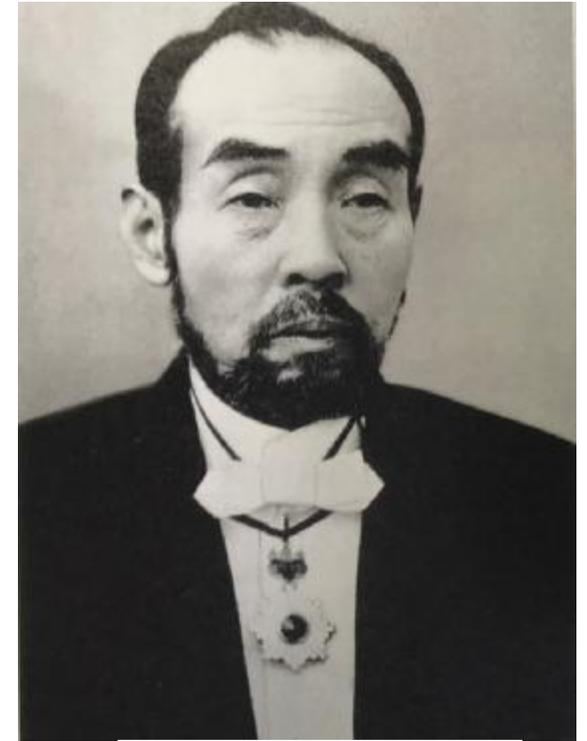
明治10（1877）年2月、西南戦争がはじまると、大阪は政府軍の兵站基地としてにぎわった。維新以来低迷を続けた大阪商況は、この内戦を契機に再び息を吹き返した。

財界の主役は、かつての豪商ではなく、**実業家**と呼ばれる人々が登場。藤田傳三郎、広瀬宰平、中野悟一、松本重太郎など。

これら新経済人の中核となって大阪の財界を再編し、その躍進を主導したのが五代友厚。



松本重太郎（双軒松本重太郎翁伝より）



藤田傳三郎

## 大阪を救った恩人 五代友厚

五代（1836－1885）は、旧薩摩藩士で、英才を見込まれて長崎遊学から欧州を視察し、帰国して藩の外国掛となった。

やがって、維新とともに新政府に出仕した。外国事務掛・同判事を経て**大阪府権判事**となり、大阪と関わるようになった。

五代の真価は、**新経済体制の組織者**という点→新時代に相応しい経済秩序。  
とくに金融体系と信用制度の確立で、株式取引所、商法会議所を創設。



大阪を救った恩人  
五代友厚

五代才助  
大坂府権判事  
被 仰付外  
國官権判事  
兼勤可有之候  
事  
六月

五代才助  
大坂府判事  
被 仰付候事  
九月  
行政官

上：「大坂府権判事並に外国官権判事兼勤 辞令」  
左：「大坂府判事 辞令」  
(大阪商工会議所所蔵資料)

## 二、大阪紡績

大阪紡績は、明治15年5月、現在の大正区の三軒家公園あたりに創立された。翌16年7月に操業を開始した。

創立を主導したのは、第一国立銀行頭取**渋沢栄一**。実際に工場の現場で仕切りしたのは公務支配人**山辺丈夫**（のち社長）であった。



渋沢栄一

山辺丈夫

## 二、大阪紡績

大阪紡績の成功が、20年以降に大紡績工場が続々誕生したきっかけであった。

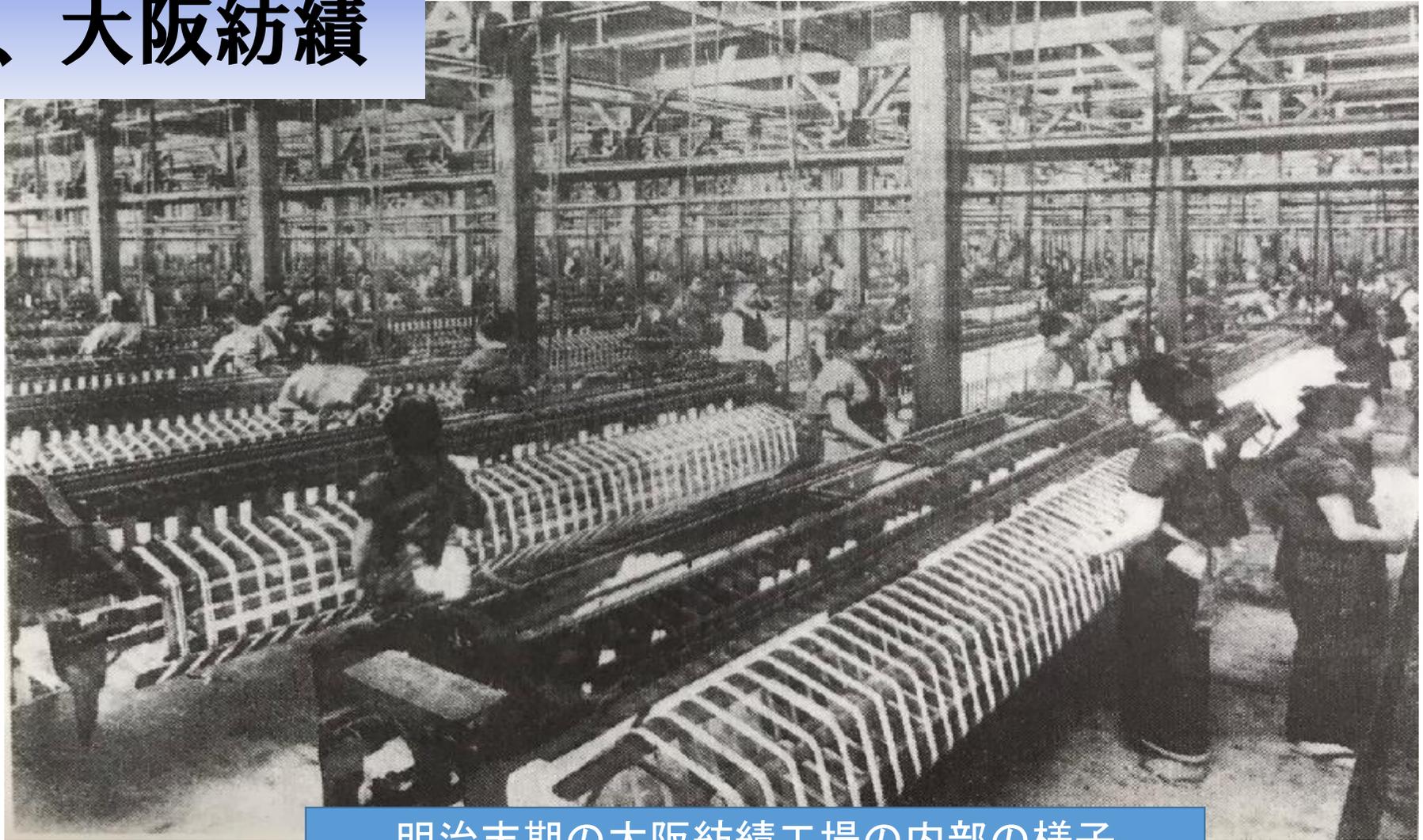
こうして大阪には紡績・紡織産業がおこり、全国的にも大きなシェアを占めるようになる。

明治20年代後半には「**東洋のマンチェスター**」という表現も使われるようになった。



三軒家にある大阪紡績の工場  
(『写真集 おおさかの100年』)

## 二、大阪紡績

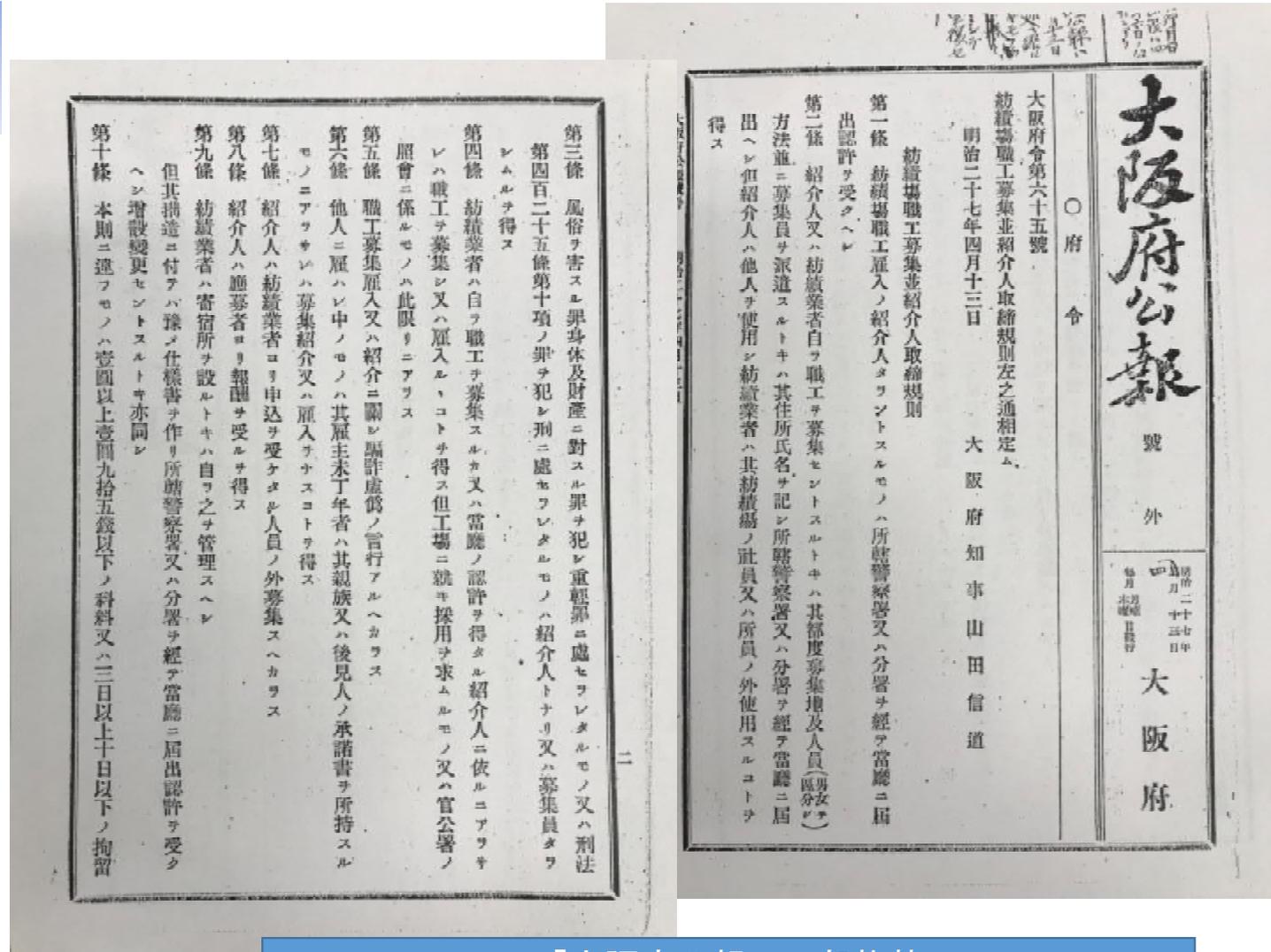


明治末期の大阪紡績工場の内部の様子  
（『図説 大阪の歴史』）

## 二、大阪紡績

紡績会社の増加は、既設の紡績会社からの職工引き抜きによるトラブルを多く発生させた。

大阪府は、明治27（1894）年4月13日に「紡績職工募集並紹介人取締規則」を公布し、雇い入れまたは紹介にあたって「騙詐虚偽」（第5条）の言行を禁止することにした。



「大阪府公報」一部抜粋  
(大阪府公文書館資料、ネット上にて公開している)

## 三、大阪築港

慶応4(1868)年7月15日に開港した安治川・川口波止場は、淀川の運ぶ土砂で浅くなった影響で大型船の出入りが次第に難しくなりました。

明治13(1880)年、大阪府知事建野郷三は、オランダ人技師ヨハネス・デ・レーケに命じて築港計画を立案しました。

明治25年、総工費およそ2249万円の築港計画が出来上がりました。大阪市の年間予算の20年分に相当する空前の大事業でした。



『大阪市大観』大正14年より

デ・レーケは、1873年(明治6年)6月に31歳でオランダを離れ、9月に兵庫港に到着。この時の契約では、4等工師として迎えられ、月給300円(警察官の初任給4円、大阪府小学校長が22円から35円)。

デ・レーケは1873年(明治6年)から1903年(明治36年)の30年間、2度の帰国の他は日本に滞在して、数々の業績を上げた(「淀川の改修」、「木曾川の分流」、「大阪港、三国港、三池港等の築港計画」など)。

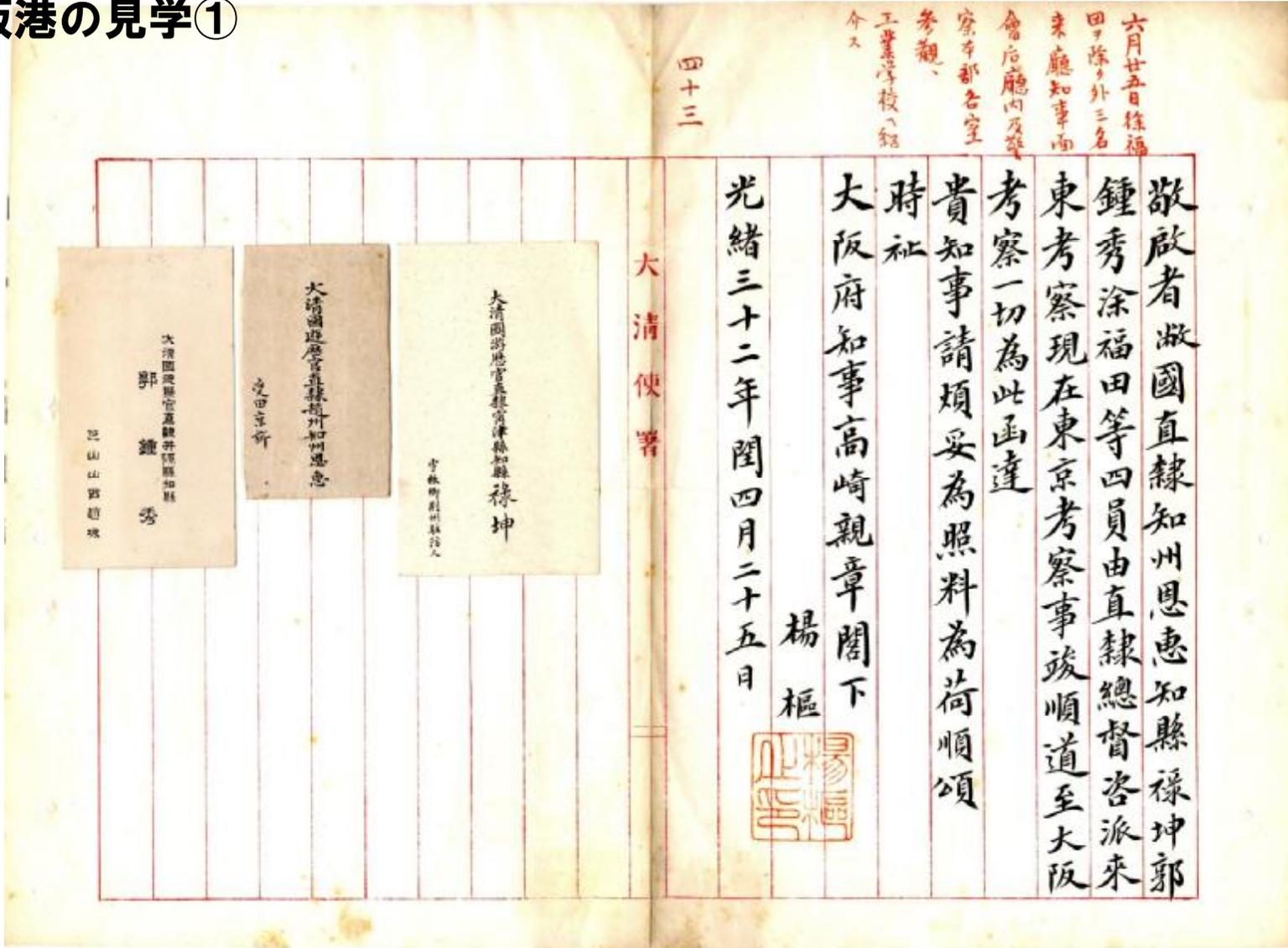
オランダに帰国後、1905年(明治38年)、清国上海の黄浦江改修の技師長として迎えられ、1910年(明治43年)に帰国。



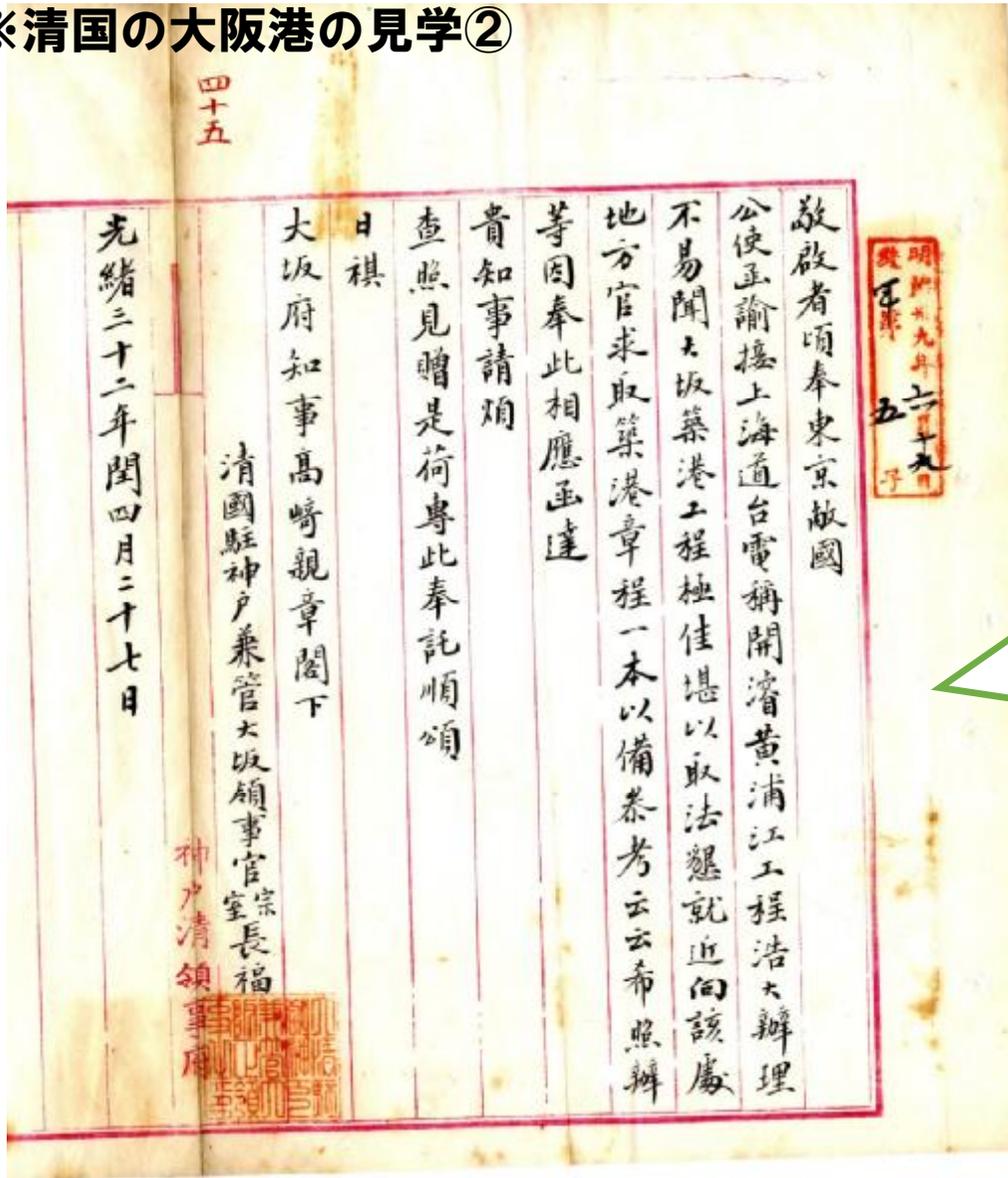
内務省技術顧問  
ヨハネス・デ・レーケ  
(1842年～1913年)

(農林水産省ホームページより)

※清国の大阪港の見学①



## ※清国の大阪港の見学②



「黄浦江」の工事が非常に困難である。大阪築港の工事施工が大変優れると聞いた。工事の参考として、大阪築港章程などの関係資料を手に入れたい、という内容のもの。

1906年、大阪築港の経験が海に渡って清国の黄浦江の工事に一定の影響を与えたと考えられる。

# 公害問題

# 「公害」の語の登場

明治10（1877）年、大阪府は早くも「鋼折鍛治湯屋三業取締法」を制定。

明治13年にさらに二項の規定を追加。

「公害」の語が最初に記された史料といわれている。



日本近代史上、いち早く公害規制に乗り出したのが大阪府である。

明治13年10月2日『朝日新聞』

六 白 五

○天第百廿拾六號

明治十年當府第百二拾三號布達鋼折鍛治湯屋三業取締法  
中へ左の二項追加候條此旨布達候事

明治十三年九月廿九日 大阪府知事建野郷三

開業出願の際若し近傍人家の内或は故障申立るもの有  
と雖も實地検査の上公害ありと認むれば之を許可せざるべし  
とあるべし○開業出願の際近傍人家皆故障ありと雖も實  
地検査の上公害ありと認むれば許可せざるべしとあるべし

○地第百六号 郡區役所

郡區吏員俸規則別紙の通相定候條此旨相達候事  
(別紙略す)

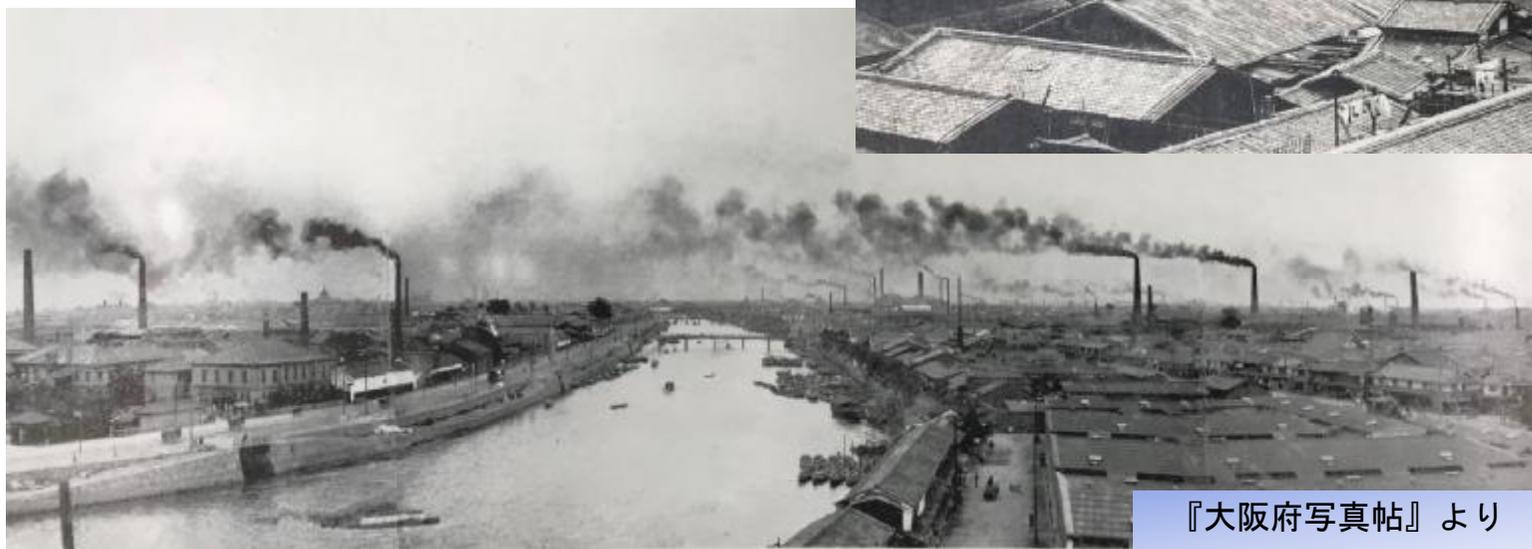
明治十三年九月三十日 大阪府知事建野郷三

報

# 「東洋のマンチェスター」 と呼ばれる理由



『大阪市大観』より



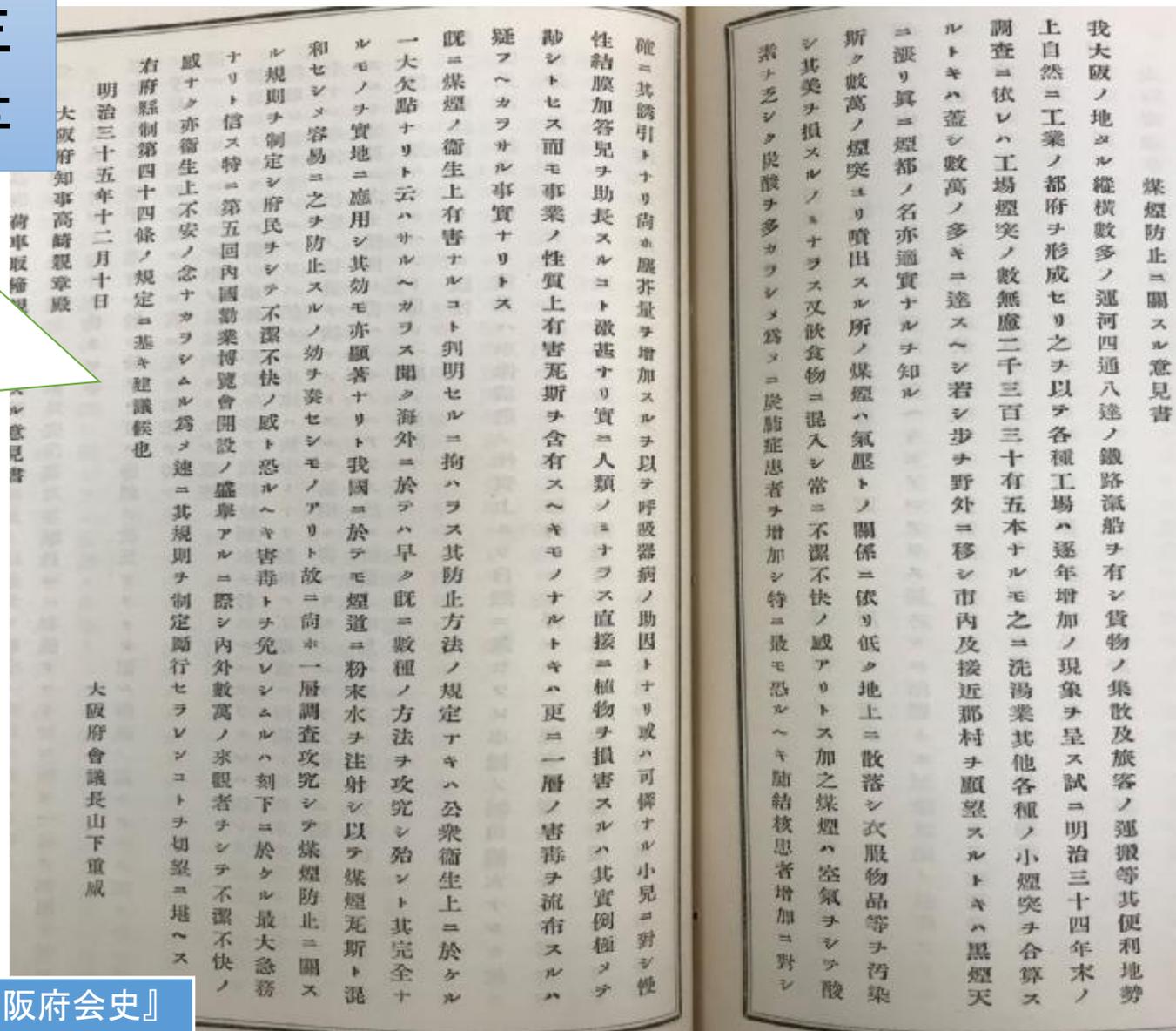
『大阪府写真帖』より

# 明治35（1902）年 大阪府会の意見書

意見書では「煤煙防止ニ関スル規則ヲ制定シ、府民ヲシテ不潔不快ノ感ト恐ルベキ害毒トヲ免レシムルハ刻下ニ於ケル最大急務ナリト信ズ」と訴えている。

明治35年2月10日に、大阪府会は府知事あての「煤煙防止ニ関スル意見書」を賛成多数で可決した。

『大阪府会史』



むすびにかえて

## ■「商業都市」から「工業都市」へ

明治期の大阪は、日清戦争前後から日露戦争前後の時期にかけて、紡績業をはじめとする資本主義が確立した。昔から四通八達した河川を利用して発展した商都＝流通都市が、急速に工業都市へとの変貌をどけるに至った。

■大阪の成功は、海外諸国からも注目される。とくに、日清戦争に負けた清国は、自国の変革のために、法制度だけではなく、工業などの分野も日本を模範とした。

## ■「経済発展か」「生活環境か」

明治期大阪は工業が発達し、人々が裕福になり、生活などの面も大変便利になった。しかし、その一方、林立する煙突から排出される煤煙が住民を苦しむという公害問題も出てきた。

→これらのことは現在の社会にも通じる問題→明治の大阪を振り返る意義はここにある。

# ご清聴ありがとうございました。

## 【参考文献】

- 『大阪百年』 毎日新聞社、1968年。
- 井上薫編『大阪の歴史』 創元社、1979年。
- 『写真集 おおさか100年』 サンケイ新聞社、1987年。
- 『新修大阪市史 第四巻』 1990年。
- 『新修大阪市史 第五巻』 1991年。
- 『図説 大阪府の歴史』 河出書房新社、1990年。
- 藤本篤ほか編『大阪府の歴史』 山川出版社、1996年。
- 『大阪春秋』 第129巻、2008年。
- 阿部武司・沢井実『東洋のマンチェスターから大大阪へ 経済でたどる近代大阪のあゆみ』 大阪大学出版会、2010年。